

抜歯後菌血症の臨床細菌学的研究

著者	岡部 孝一
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成2年7月
ページ	21
発行年	1990-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14772

学位授与番号 医博甲第 926 号
学位授与年月日 平成 2 年 3 月 25 日
氏 名 岡 部 孝 一
学位論文題目 抜歯後菌血症の臨床細菌学的研究

論文審査委員 主 査 山 本 悦 秀
副 査 中 村 信 一
松 田 保

内容の要旨および審査の結果の要旨

抜歯後菌血症の発生に関与する因子および原因菌を明らかにするため、また、抜歯後菌血症の抗生物質による予防法の検討のため本研究を行った。菌の分離は、抜歯後 5 分以内に静脈血 3 ml を採取し、直ちに玉井・福田培地 30ml を含むカルチャーボトルに注入し、37℃にて 24 時間、72 時間、7 日間増菌培養することにより行った。得られた成績は以下のごとくである。

① 抜歯術症例 183 症例中 132 症例 (72.1%) に菌血症が認められた。② 抜歯術適応の原因疾患との関係では、原因疾患が炎症性疾患の場合菌血症発生率は高かった (発生率, 78.1%)。

③ 20 歳未満では菌血症発生率は低かった (発生率, 42.9%)。④ 抜歯術に 100 分以上を要した症例では菌血症発生率は高かった (発生率, 96.4%)。⑤ 抜歯本数の増加にともない菌血症発生率も上昇し、特に 15 本を越える多数菌抜歯では全症例に菌血症がみられた。⑥ 抜歯術中の出血量の増加にともない菌血症発生率の上昇が認められ、特に出血量が 50ml を越える症例では高い発生率 (90.3%) を示した。⑦ 乳歯抜歯は永久歯抜歯に比較して、菌血症発生率は低かった (33.3%)。⑧ 抜歯後菌血症 132 例中、嫌気性菌単独感染症例が 84 例症、好気性菌と嫌気性菌の混合感染症例が 18 症例であり、全症例の 77.3% に嫌気性菌が関与していた。

⑨ 132 症例から好気性菌 55 株、嫌気性菌 132 株が分離された。高頻度分離菌株は好気性菌では Lactobacillus (15 株)、Staphylococcus (12 株)、Streptococcus (12 株)、嫌気性菌では Eubacterium (40 株)、Peptococcus (31 株) であった。⑩ 好気性菌 51 株、嫌気性菌 130 株、計 181 分離菌株について抗生物質感受性試験を 3 濃度ディスク法により行った。好気性菌群では ampicillin (ABPC), cephaloridine (CER), tetracycline (TC), erythromycin (EM), clindamycin (CLDM) に対して 90% 以上、penicillin G (PCG) に対して 88.2% の菌株が感受性であった。嫌気性菌群については PCG, ABPC, CER, TC, EM, CLDM に対し 90% 以上の菌株が感受性を示した。⑪ 抜歯術開始 30 分前に ABPC1g, CER1g あるいは CLDM0.9g を静脈内投与した時、菌血症発生率は、各々 10、10、20% にすぎず、これらの抗生物質の術前投与は、抜歯後菌血症予防に有効であった。

以上、本研究は抜歯後菌血症の発生に関与する因子および原因菌としての嫌気性菌の重要性を明らかにし、かつ ABPC, CER, CLDM の術前投与が抜歯後菌血症予防に有効であることを明らかにしたものであり、口腔細菌学、歯科口腔外科学に寄与する価値ある労作と評価された。